芸振

大分県芸術文化振興会議会報

県音楽特集号　NO.6　46.5

発行所・大分市大手町　県教育庁文化室内　県芸術文化振興会議事務局

発行人・米田貞一　　編集人・田村卓夫

SALZBURGと姉妹都市に

千本延隆

もし大分県出身のすべての音楽家が大分に帰ってきたら、それは音楽の都ウィーンのようになるだろう。

モーツアルト生誕の地、ザルツブルグの姉妹都市としてふさわしい都になるためには、何といってもすぐれた音楽的環境が必要である。そのためにはまず、県立の芸術文化会館を建設しなければならない。現在の大分文化会館はある程度の規模をもったホールであるけれども、構造が日本の古典芸能を上演するにふさわしい舞台で、洋楽のためには適当ではない。たとえばステージが縦に比較して横が長すぎるとか……。われわれが望んでいるのは奥の深いホールであって、この点東京の第一国立劇場と、現在盛んに芸術関係者が要望している第二国立劇場建設との関係に類似している。

そこで県立芸術文化会館のビジョンについてのべてみると、第1にオペラ、バレエ劇場である。それはどちらの舞台装置もできるステージをもった劇場であること。第2に1000人と 500人のゆったりした座席を持つ音響効果のすばらしい中・小ホールをつくることである。第3にオーケストラ、合唱、バレエ、演劇、人形劇などの練習が自由にできるへやをもつこと。現在大分県の文化が低調である一つの大きな原因は、以上の様な音楽的な施設がないことと、↗同時に第4にあげられる資料などを展示するへやがないことである。だから展示室をぜひ作ること。第5に舞台装置、衣裳、貸衣装などを保管できる格納庫を作ること。これがあれば、日本中のどこと提携しても必要なものを、互いに貸したり借りたりできるようになるだろう。

広瀬通秀（県立芸術短大教授・独立美術会員）

最後に施設とは離れて、オーケストラの楽員、オペラ歌手、バレリーナなど演ずる人の問題であるが、地方ではほかに仕事を持ちながら音楽やその他、芸術の分野でがんばっている人が多いが、こんな人が兼務の形式で存分に活躍できるようなシステムがあれば、と思うことである。これは施設設備同様に考えなければならない大事な問題である。

さて、ウィーンのシェーンブルーン宮殿のように美しい建物、美しい庭園そして完備された各室、こんな会館が完成されたらザルツブルグと姉妹都市になるための大きな第一歩が進められたといえるのではなかろうか。

県立の芸術文化会館を完成させるためには、まず芸振会議が中心となって県と接渉し、会館建設のための基金をつくり、さらには芸振会議を法人化して予算を獲得し、建設のために大いに努力するのも夢ではないと思う。　（県芸振会議副会長、県音協会長）

軌道にのる県音協会

今後は意欲的な研修会を

北村宏通

I　組織　・（名誉会員）中山悌一・園田高弘・（会長）千本延隆・（副会長）辛島武雄・中山明二・（委員）<声楽>藤村晃一・首藤迪子、<器楽>小長久子・辛島醇一・久保不二朗・安倍孝次、<楽理>加藤公康、<教育>松尾英一・関茂、<顧問><賛助会員>は現在音楽に理解ある各位に依頼中。（事務局）<事務局長>北村宏通、<事務局次長>永江星光、<事務局員>林フミヨ・後藤美知子。会員数は現在約100名と、2団体。県音協が社会的に価値ある存在にすべくひたすらに実績を積み重ねてきたその一つのあかしとして、過去3年間県芸術祭の開会行事を制作し、いずれも芸術祭特別賞を受賞した。今後は会員の資質の向上を計ることや、まだ未加入の音楽関係者がこの会に魅力を持って入会されるような行事を企画して、組織整備に全力を傾けたいと考えている。具体的には、合唱指揮法の研修会などを考えているが、これから慎重に検討したい。

II　運営　・協会の運営方法はごく一般的で、各部門（声楽・器楽・楽理・教育）の代表である委員と、会長、副会長事務局との役員会で原案を作成し、それを総会で審議決定したうえで事務局が運営する。また年度途中において、県音協の主催（助成金・収支決算報告の義務のないもの）とめいうつ場合や、その他のささいな問題については役員会で決定する。また協会が個人や他団体を後援する場合は、会長の了承を得ればよい。常時会員の要望を聞くために、事務局は各会員と積極的に連絡をとる。なお運営のための経費については財源として、会費以外に、県、大分市の補助金、更に事業を行なう際の広告料や、入場料金などがこれに当たる。この総経費額は、過去3年間の平均をとると、約400万円位。来年は協会結成5周年にあたるので、1000万円位に事業を計画している。

未来への課題としては、ザルツブルクとの姉妹都市構想のように「ザルツブルク音楽祭に匹敵する音楽祭を開催するにはどうしたらよいか」で、そのためには、県芸振会議がすべての面において、巨大な力を持つことが絶対的である。汚れた都東京、大阪ではこのことはもう不可能なのだから、この大分県こそこれを担うに最適だと確信している。これを実現可能にするためには、強い意志の力があればもう夢想ではなくなる。一歩を踏み出すために、ザルツブルクを視察して文化行政のあり方や、助成金の内容をつぶさに調査しようと思う。以上のことを結論的にいえば、芸術文化に携わる方々が、どんなに熱意を持ち続けるかがこの解答になるのではなかろうか。

県民オペラの第3弾

「カバレリア・ルスチカーナ」

小長久子

第1回県民オペラ、モーツアルト作「フイガロの結婚」を上演して来年は早くも5周年を迎える。

舞台の「かみて」「しもて」もわからない人たちが、とにかく夢我夢中でオペラを上演してみて、地方でもオペラはできるという自信を得たことは大きな収獲であった。同時にいろいろの問題もでたが一致団結してこれをのりこえ、三大オペラの一つといわれるヴェルディ作「椿姫」を昨年10月3日、4日、大分市文化会館で上演、つづいて日田市、竹田市、宇佐市、湯布院町の各地方で公演を行ない、延べ約1万人の観客が声援を送ってくれたことは県民オペラの将来に明るい希望をもつことができた。これに対して県より全国まれなオペラ助成金として百万円の援助があった。県民オペラの成功はこうした県の補助ならびに大分合同新聞社をはじめ報道、放送関係、知事、市長を顧問と長野正氏を会長とする後援会の援助による力が大きい。

この運動は他県を刺戟し、去る2月10日鹿児島市で南日本新聞社90周年の記念行事にモーツアルト作「魔笛」が上演された

またこうした地方オペラのあり方は中央でも高く評価され、オペラ評論家として第一人者の宮沢縦一氏は文化庁をはじめ、二期会、藤原オペラ、「音楽の友」に紹介、応援くださり、指導に来県された重松澄江氏も日伊協会に大分の県民オペラを紹介された。関西音楽新聞にも同指導者横井輝男、演出の桂直久氏はペンをとってたびたび紹介につとめられた。また去る4月20日帰県された立川澄人氏は舞台裏を訪れたオペラの関係者一同に「2回、3回となるとだんだん周囲の目がきびしくなる。いろいろの雑音に耳をかさないでがんばって欲しい。回数を重ねることによって本当の理解者が生れる。私もできるだけご加勢しよう。中央とのつながりにもなり、将来、中央との合同公演も計画しよう。」と励ましてくださった。

東京芸大教授、二期会々長の柴田睦隆氏が〝音楽展望〟にオペラ振興の問題点と題して「地方都市に定着し、地方に密着した音楽活動を推進しようとする時、その指向するものがオペラであることはもっとも自然なことである。」と論じている。

県民オペラも第3作、マスカーニの「カバレリア、ルスチカーナ」の立稽古まで進み10月の公演を目ざしている。これまでよく関係者は力を合わせ多くの障害をのりこえてきたものだと思う。出演者ばかりでなく、大分交響楽団、その他の団体、指導者や舞台関係者など多くの人々の協力には全く感謝のほかはない。

一つ一つの問題を解決してゆくことが県民オペラの発展につながり、定着に結びつくものだと思う。現実の問題としては練習場がほしいということである。イギリスのオペラ作曲家ベンジャミン・ブリテンが24年前オペラグループを結成、生れ故郷の一漁村で歌手たちが旗あげしてから20幾年、地方の教会を会場に町から村へとオペラを上演したという清水脩氏の随想を読

Ⅲ　事　業

＜昭和43年度＞

①第1回新人演奏会、②映画「ベートーベンの生涯」、③第4回県芸術祭開会行事、オペラ「フィガロの結婚」

＜昭和44年度＞

①第2回新人演奏会、②第5回県芸術祭開会行事、「オーケストラの伴奏による大合唱の夕べ」、③ピアノ研修会

＜昭和45年度＞

①第3回新人演奏会、　②井上節子・直幸ジョイントリサイタル、③第6回県芸術祭開会行事「ベートーベン生誕200年記念演奏会」、④第6回県芸術祭主催オペラ「椿姫」

＜昭和46年度＞

①久保不二朗ヴィオリンリサイタル、②第4回新人演奏会、〝今後の計画〟　③立木稠子ソプラノ独唱会8月31日、（火）大分文化会館、④第4回大分県音楽協会演奏会、9月12日（日）別府国際観光会館、⑤オペラ「カヴァレリアルスチカーナ」10月9日（土）大分文化会館、⑥北村宏通バスバリトン独唱会10月10日（日）大分文化会館、

事業における今後の課題は、会員のための研修会の数をふやすこと、特に若い会員は、常に演奏を聞きあって、意見の交換をしたり、先輩に指導を受けたりして、研究を続けやすいような機会を作りたい。そしてその成果を多くの方々に聞いていただくため数人でジョイントリサイタルを持つことが必要だ。今までの事業を更に発展させるために望ましいこととしては、新人演奏会があるが、毎回高く評価されている。残念なことに聴衆が少ないので、ＰＲの方法を検討したい。県音協演奏会は、会員の発表の場として、県美展のように意欲的なものでなければならない。オペラについては歌い手の地位だとか実力だとかが一番問題になるが、幸い大阪から素晴しい声楽の指導者を迎えて、音楽は形づくられている。個人については問題点がある。それはボイストレーニングを忘れないように続けないと、現在の壁は打ちやぶれない。県出身者に優れた声楽家が多いのだから、彼等とタイアップしていけば充実したものになれると思う。また演出家については大分在住の演出家を養成して、演出助手として、定期練習時に指示を与えられる人材が欲しい。以上主な２点をあげたが、来年の「マダム・バタフライ」はこれらの問題を打開して、素晴しい舞台にしたいものだ。最後にオーケストラについてであるが、現在の形態は、大分交響楽団に、芸大、緑が丘の先生、学生が客員として参加しているが、これも全員が団員という意識のもとで練習されると、例えば九響位のレベルにはすぐなれる。今一度組織を考慮して、優れたオーケストラになりたいものだ。他県の例では、文化庁から平均500万円位の助成金を受けているオーケストラがかなりある。もう一歩で大分交響楽団もそれらのオーケストラと同等になれるのだ。

（県芸振会議事務局次長・県音協事務局長）

むと、外国においてでさえオペラ運動の安易でないことがわかる。大分には完備された文化会館があり、私どもは非常に恵まれている。ねがわくば練習場と、少なくとも中央から１か月に１度、実力と経験のある指導者を招へい指導をうけ、文化会館が十分使えるだけの経済的な余裕がほしいものである。

（県民オペラ総監督）

「椿姫」は県文化行政の見事な結晶

最近見た大分合同新聞によると、大分県全体が一丸となって歌劇「椿姫」を上演したと、カラー写真入りで、紙面一頁をさいて報道していた。大分県では1968年にも「フィガロの結婚」を県民の手で上演しているが、一地方において、このように本格的オペラを上演できたことは、日本の現状を考えた場合に奇跡的できごとといえる。これは、県という大きなバックアップがあって、はじめて成し得たことで、地方における文化行政の見事な結晶といえよう。

ヨーロッパではどんな地方にいっても、オペラ・ハウスがある。それが、その地方の文化の中心となって、人々の心をうるおしているわけである。そういった心のゆとりが、人間性に根ざした、豊かな国を作っているのだろう。

日本にも、さきほどの大分県の例が示すように、その芽はないわけではない。たとえば広島県でも仙台でも、県民によるオペラ運動はある。徳島県にもその動きが起こりつつある。大分県民オペラは、このように静かに日本に波紋を投げつつある。しかし、この輪を大きく、そして強いものにするには、国家という大きなバックボーンがなければ、いつか消えてしまうかもしれない。この国家を動かすのは、われわれ国民でもある。

日本の高度成長に酔ってばかりいると、きがついたときには人間のぬけがらだけがのこっていることになろう。

大分県民オペラがおこした奇跡は、単なる奇跡でおわらしてはならない。1971年はその大きな飛躍の年になることを願いたいものである。　　「音楽の友」１月号から転載

結成８年目の大分交響楽団

加　藤　公　康

交響楽団が発生したのが、昭和38年の秋だからもう７年以上も経つ。その間、国体の年を除いて、毎年１回以上は、演奏活動を行なってきている。県民オペラも、この交響楽団があったればこそ、との自負も持っている。

創立当初のガムシャラな時代から、一応形のできた今日、いろいろ反省すべき点は多い。最近は、会費もとらず、音楽会の多少の利益と、一部団員の好意などで、今までやってきたのが実情であるが、今後何らかの形で、経済的な裏付けをしっかりすることが、将来の発展のために必要と思う。

一口にアマチュア交響楽団といっても、全くのしろうと（職業を別にもっているだけで、腕は結構じょうずな人も多い）と音楽の専門家、学生との混成チームである。もちろん、団（オケ）の運

人魚姫によせる歌

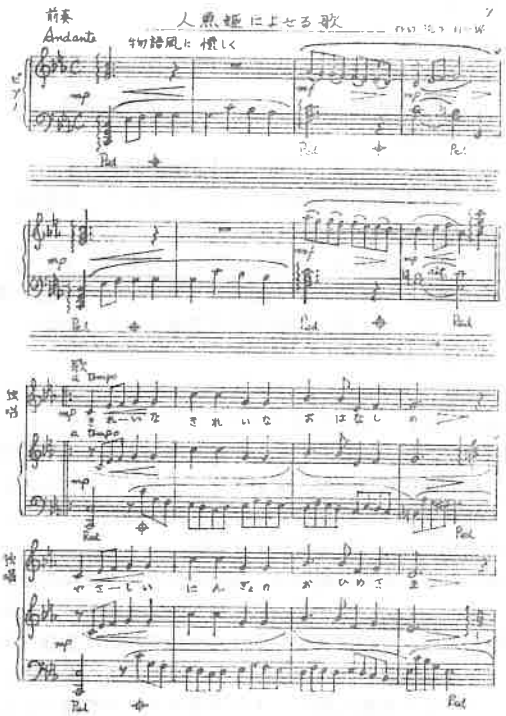
作詞　渡辺　克己　　作曲　滝本利一郎

1. きれいな　きれいな　お話しの
やさしい　人魚の　お姫さま
なかよし　こよしに　なりましょう
アンゼルセンの　お国から
こんにちわ　こんにちは
いらっしゃい　いらっしゃい

2. なみだを　うかべて　ただひとり
王子の　しあわせ　いのってた
かなしい　お話し　ききましょう
北の海から　波こえて
こんにちは　こんにちは
いらっしゃい　いらっしゃい

3. 真珠の　あわより　うつくしい
お空の　お星に　なるように
いっしょに　お祈り　いたしましょう
デンマークから　はるばると
こんにちは　こんにちは
いらっしゃい　いらっしゃい

4. あなたの　おすきな　王子さま
日本の　みなとに　いるかしら
おとぎの　お国へ　いきましょう
ようこそ　人魚の　お姫さま
こんにちは　こんにちは
いらっしゃい　いらっしゃい



営その他、中心になって動くのは、アマチュアの人であるが、この人たちだけでオケは成り立たないし、音楽的にも限界がある。当然、専門家の応接を願わなければならない。幸い、芸短大緑が丘高校などの音楽の先生方や学生諸君の奉仕的な協力で、何とかオケとしてのかっこうはつけている。しかし、特殊な楽器の奏者は不足で、音楽的にもアンバランスな点はぬぐえない。また、団員の絶対数も不足で、特に、女性が多いため一身上のつごうで止めても、簡単に補充がつかないのが難点である。適当な練習会場がないのも、悩みの一つである。ここ数年使い慣れていた所が、持ち主のつごうで、最近使えなくなったので、ますます困っている。大きな楽器や譜面台などは、練習のたびに、持ち運ぶのはたいへんである。せひ保管のきくような所が欲しいとつねづね思っている。

身びいきかも知れないが、今までのところ、団(オケ)のふんい気は非常によい。とかく、多人数の集りにありがちな、もめ事も余りきかない。年齢層も広く、職業もバラバラだが、ほんとうに音楽の好きな人たちばかりが集っているからであろう。それがまた、7年以上もオケを長続きさせてきた原因と思う。やはりこうしたふんい気は大切にしなければいけない、しかし、今後はそれに加えて、音楽的な充実が必要である。しろうとゆえ自分たちが楽しければよいというのは、聴き手がだんだん離れてしまう。もちろん、音の面だけについてなら、何とか金銭のつごうをつけ、いろいろな所から、エキストラをつれてきて、いまのへたなメンバーを切り捨てれば簡単であろう。しかし、それでは余りにも性急すぎるし、長続きしない。プロのオケを作るならともかく、地方の文化運動として考える場合、そう簡単に割り切る訳にはいかない。しろうとと専門家がいっしょになってのいまの姿こそ、意義あることではなかろうか。音楽的な充実、向上が、今後の最大の課題であるのはもちろんだが、いまの在り方のままでも、向上の余地は十分あると思うし、また、それを果たすのが、指導者である私の務めでもある、と思っている。

（大分交響楽団指揮者）

合　唱

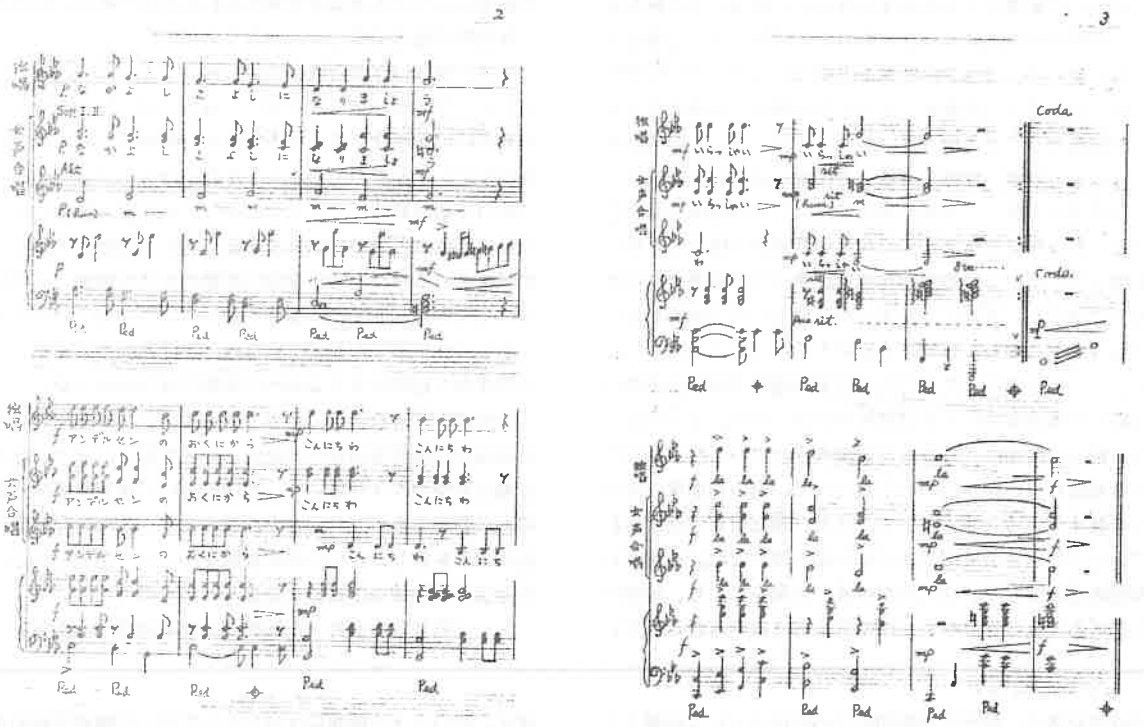
大分県は声楽の豊庫

挾　間　文　男

全日本合唱連盟は昨年やっとひとり立ちをし法人化された。にもかかわらず今や合唱人口は全国的に減少の傾向にあると言われるが、大分県においては、横ばいの状態、あるいは見方によってはこれから盛んになるのではないかとも思われる。

先ず近年の県内における合唱活動を挙げてみると、一昨年昭和44年第1回大分県合唱祭、昨年昭和45年に第2回の合唱祭を連盟の主催で開催し合唱愛好者の良き交流の彼割りを果した。高校、大学、職場のほか、一般の市民、特にママさんコーラスの参加が得られたことは大きな収獲であった。

高校の団体はそれぞれきびしい進学体制下にありながら指導者、団員ともにコーラスのすばらしさを求めて精進しておりそ



この曲は、マリンパレスの依頼で45年7月10日に完成、同月22日の人魚像除幕式に、金池小児童合唱団によって初演されたもの

の姿は美しいものである。大学の合唱団は学生運動のあおりをくらって参加がな無かったのは何としても淋しいことであった本年度の活躍を大いに期待したいところである。職場コーラスも、もっと県内に誕生してもよいのではないかと思う。合唱の楽しさの面を大いに追求してもらいたいものである。

一般の合唱団は、それぞれ意欲的で、自主的な公演をしている団体もある。各人が多忙な職業のかたわら、楽しさと共に音楽的にも質の高いものを求めて合唱への意欲を常にもやしている、またママさんコーラスは家庭婦人の健全な音楽発表の場として貴重な存在ではないだろうか。コーラスグループがあちこちに作られ歌ごえの輪が広げらて行くことを心から願うものである。合唱連盟の他県の役員の言によれば『大分県は声楽の豊庫です。これからの合唱はきっと大分がリードするような時代になるでしょう』と。合唱運動に情熱を注ぐ指導者とそれを支える愛好者とがより高いものを目標にして努力すれば、これも実現不可能なことではない。

今まで存在のうすい合唱界であったがより発展させるために一層の前進と自覚が必要なのではないかと思う。本年もまた合唱祭の開催と例年の合唱コンクールが企画されている。来年度は、順番通りに行けば、西部合唱コンクールが大分県で開催されるはずである。この大きなコンクールを引き受けるには、更に大きな充実が必要であろう。

（全日本合唱連盟大分県支部事務局長）

吹奏楽

大分国体によって発展

和　田　政　見

大分県の吹奏楽が現在のように盛んになったのは昭和40年頃からだと思う。41年に第21回国民大会が本県で行なわれるため大分別府を中心に県の補助金を受けて、各チーム33人編成のバンドを作ったのがそもそものきっかけであった。それまではごく僅かの高校中学校に吹奏楽部があり、校外活動演奏活動もあまり行なわず、楽器好きの部員が好きな楽器を吹いていたに過ぎない。技術向上のため講師が巡回指導をし講習会を重ねることによって国体時の入場行進では立派な成果をあげることができた。と同時にこれを機会に吹奏楽の演奏活動が各地で向上の一途をたどった。西部の吹奏楽コンクールは31年に始まったが当時西部地区（九州11地区）のレベルは熊本県がずばぬけていて常に上位の成績を占めていた。その数年後本県から初参加した県立緑が丘高校は、県内で抜群の成績を持ちながら西部地区で下位に甘んじていた。本県によってはその目標を熊本県においていたわけである。その後各団体指導者で自主的な研究をつみ講習会に多く参加しサークル活動に、グループ研究に技術向上を計ると共に、部外活動ステージ演奏各団体の交流を盛んにして練習をつみ重ね、緑が丘高校を初めとし別府商業高校、中津中学、別府浜脇中学などが西部のコンクールに出場して、か

作　曲　演奏家の協力が必要

辛　島　武　雄

元来、音楽家のうち作曲家となると、非常にその数が少い。音楽の特殊性によると思われる。音楽に志して進む人たちの多くは、はなやかな演奏方面に走っていくのが実情であるが、県内の音楽家たちも、教育関係の音楽家を含めて、演奏することに精一ぱいの努力を払って、作曲活動をつづける人が少い状態であることに変りはない。

作曲家は、新しい音楽の創造に向ってその精魂をかたむける。そうしてできあがった作品を音楽界に提供する役目を持っている。この意味で作曲家はすべての音楽文化の原動力であるが、表面にはあまり浮び出ないので関心もおのずからうすくなり、特別な人たちのすることと考えているらしい。県出身の大先輩である作曲家滝廉太郎氏の創作は当時の日本音楽界に大きな波紋をえがいたが、そのすばらしい数々の名曲は、今日もなお演奏されている作品だけにその場限りの作曲が行われる現代人に、真の作曲家のあり方を教えていると思っている。また、現在東京で活躍されている宇佐出身清瀬保二氏は私の知る限りでは、純粋な日本的感覚の持主で、前代的な特質の音楽をつくり、独特の色彩感あふれる作品をわが国の音楽界に提供されるので、作曲家としての大きな道を開拓される存在である。県出身の作曲家に敬意を表したいとろである。

県内の現在の作曲活動について語ることになったが、すらすらと筆が進むならば苦労はいらぬ。語る内容を持ち合わせないのが残念である。先年の大分国体のとき、開会行進曲やダンス曲をつくった人々を思い出している。最近では大分市新民舞曲「チキリンばやし」の作曲に関係した人々は、国体のときの顔ぶれである。考え方ではどのようにも解釈されるけれども、学校の校歌や小さな歌曲、さては流行歌程度の作曲または編曲ぐらいで、作曲家といえば少しおもはゆい感じがしてならない。作曲家の内容はどうあるべきかと自問自答する県内の実情ではなかろうか。

作曲家を育てるには、小さくともよいから作曲家の作品を演奏する演奏家の協力が絶対に必要である。また、作曲に関心を持つ人々が集って、作曲について研究討議する機関も必要である。これからの課題として、県内の作曲家が進んで手を握り、一つの研究機関を持つべく努力し作品の検討会と作品演奏の具体化を進めたいものである。

（県音協副会長・全国児童音楽家連盟作曲会員）

なりの成果をあげ、県内吹奏楽団の中心的存在として活躍してきた。現在吹奏楽連盟に加盟ししいる団体数は職場3、大学1高校10、中学校21の35団体であるが他県に比してそう少ない数ではない。しかし未加盟団体がなお30団体位あることを思うとコンクールのための連盟でなく吹奏楽の本質的な内容を向上させるための行事を多く持ってより多くの団体が加盟し相互連携の上にたって、より発展的な吹奏楽連盟へと脱皮をはかる時期にきていると思う。

さて吹奏楽の向上は全国的にもめざましいものがあるが実施上の問題点は運営面で楽器の値段がたいへん高いということである。39年県の補助を受けた時は、国体という名のもとに市や地域社会の協力を得て理想に近い楽器をそろえてきたが既に7８年経ってみるとほとんど買い替えの時期にきている。オーバーホールしても使用できない楽器が多々あるし、既に廃品同様な楽器がへやの隅にほこりにまみれているのが現状である。

ミリタリーバンドといわれた吹奏楽も、コンサートコンクールのほかに野外演奏パレードなど演奏活動も広範囲になるに従って高い芸術性を要求されるようになった。今後はその目的達成のために吹奏楽指導者の組織作り、研究機関など連盟を中心として発展的に活動分野を広げていく方向にもっていかなければならない。

（県吹奏楽連盟会長）

軽音楽

生活の中に生きる

中　野　幸　和

戦後、雨後の竹の子のように発生したアマチュア音楽演奏団体は、若い人々の情熱のはけ口として大いに隆盛を極めた、その人々の中から一部はプロの軽音楽界へと移行し、一般の音楽同好者は、聴衆のより演奏水準の高い音楽への欲求が高まるとともに、アマチュア音楽をうけ入れなくなり衰退していった。これは一般音楽同好者の演奏する音楽が、技術的にも、音楽的にも基盤が欠除していたため次第にその影をひそめてしまったものでもある。このような意味づけの隆盛と衰退の歴史を何度か繰り返しながら今日に致っているのがアマチュア軽音楽団体の実体である。

職場の中に組織されている音楽集団は、吹奏楽、スイングフル、コンボ、ハワイアン、マンドリン音楽、コーラスなどであるが、いわゆる軽音楽といわれているものは、テレビや、ラジオの影響をうけ、愛好者の数は増加の一途をたどっている。そして演奏している曲や、そのスタイルも、テレビ、ラジオなどの影響を大きく受け、徐々に演奏水準は高まり、音楽の心の表現にも近づいて来ているが、基本的には、より高い演奏水準というよりも、生活の中で音楽を楽しむという姿勢で存立しているのが現状である。

しかし演奏水準向上への努力を放棄することはできないし、このへんの兼ね合いが問題になろう。この意味で、楽器会社や音楽団体の全国組織などで主催するコンテストや、コンクールなどに参加したり、多くの聴衆の前での演奏会や、基礎的な練習のための研究会などの機会を設けるとともに、これに積極的に参加することなどが必要だといえる。

将来は、軽音楽団を真剣な研究的体質を持った音楽組織としそれを安定させ、聴衆と演奏者が一体となって生活の中で音楽を楽しむとともに、自分たちで曲を作り、アレンジし、その意味での楽しさも追求するようになっていきたいものだと考えている。

（県芸振会議理事・県職場音楽連盟事務局長）

邦楽

新分野の創作を試みる

田中絹枝

箏曲が一部の愛好者のみによって支えられてきた時代は終わり、現在ではますますその底辺を広げつつあります。しかし地方では安易に伝えることのみにならされて、芸に対する自己批判のきびしさに欠け、ややもすれば甘やかされ過ぎて自己満足に陥る傾向にもなりがちです。

ところで県芸術文化は日を追って盛りあがり、活発な動きをみせておりますが、邦楽は他の部門に比較してそれほど意欲的な活動をみせておりまん。表面的にはブームにのっている様に見えても、それが真の発展につながっているのか、または一時的なものであるのかを十分考えてみる必要があると思います。

その様な中にあってわれわれは常に目標を高く持ち、古典を大事にして同志をより多く広げ、育てて行かねばならないと思います。芸の世界に生きることは誠にむずかしく、元来は伝統を伝えることのみで終わっていたのですが、これからの指導者は西洋音楽の楽理をしっかりと身につけ、意欲を燃やして自分の力をきびしくためすことが先決問題です。すべてを中央にゆだねるといった安易な根性は捨てなければなりません。

いまは故人となられた大分県三曲協会創立者、都山流の藤本柳山先生は、邦楽を深く理解された方でした。そしてその当時からすでに現在を見ぬかれた発言をされていましたが事実その通りの時代になってきております。藤本先生が今日、実在されていたら立派な仕事ができていたでしょうと故人をしのびながら県邦楽界にとって大きな損失であったことを今さらながら惜しむ次第です。

さて、邦楽部門の当面の心構えは、まず広範囲な音楽理論をしっかり身につけ、古典をみがき、新しい時代を窮めて、新分野の創作を試みることであると思います。この積み重ねがあすの県邦楽会を盛りあげ、発展させる方向へ導くものと堅く信じております。

（創明音楽会九州支部長）

県三曲協会役員

▽会長／遠藤梢山（大分市）▽副会長／川口九山（大分市）・菊水秀芳▽（別府市）▽幹事／横松尋山（中津市）・辛島澄風（大分市）・後藤碩山（大分市）・菊園美智子（大分市）・三浦敬子（別府市）・原口价山（別府市）・佐藤勢山（臼杵市）・板井南桜山（大分市）・岡野美恵子（大分市）・菊秀紀美代（別府市）・長崎洋山（佐伯市）・山下奉山（大分市）・菊山覚白（佐伯市）・賀来歌房（別府市）

詩吟

一大ハーモニーを

深田光壽

最近の吟詠ブームは、とどまるところを知らない。日本の吟詠人口は 500万人と称し、盛んな上昇気流に乗った感じである

わが大分県の現況はどうであろうか。

県連盟で把握したところでは、日本詩道会関係の、 4,500余名を筆頭に、日本詩吟学院関係の、 1,200余名、関西吟詩同好会関係の、300余名、大阪関心流関係の、200余名、その他の諸派200余名と多少の誤差はあるにしても、大体6,500余名を数える吟詠人口が考えられる。まさに吟詠の花、多彩に咲き誇るといえるであろう。

そこで、今の吟界で取りあげられている課題の中で、大分県には共通なもの一、二をひろってみたい。

1　吟の芸術性と精神主義・吟道で大事な要素は素朴な味だ素朴さと気品と気魄、この三つが吟の三大要素だ。この理解なしでは吟は通じない。しかも、やまと心の、おおらかさ、りりしさ、ゆかしさ、これがまた吟道に通ずる。建築でいうなら伊勢大神宮の建築様式がぴったりだ。

しかし、詩吟も声楽に似て一種の技能であることに変りはない。そこに音楽性が要求され、芸術といわれるゆえんともなる吟ずる素材、詩の精神を表現する技能、これが優れて芸術化する。

2　吟道と社会教育の接点・吟道から精神主義をとったら、アルコールの抜けたビールみたいなものになる。しかし吟道とは日本精神だなという昔流の固苦しい表現はさけるがよい。吟をやれば長寿につながる、情操をゆたかにする、人間の生きがいを感ずるというようなことから、おくゆかしい音楽的なものだと理解させる。

さて現代の不幸とは、青少の非行、道義の退廃が大きくあげられる。おとなも子どももひっくるめて疎外感を生み、虚脱感にひたる。気の弱い者は人生に絶望して自殺し、過激な者は反体制の戦列に走る。文明の速度が極限にきているから、自力で判断したり、選択する余裕がない。これも公害の一つとも考えられるが、要するに日本人としての自信喪失に帰因する。一方西洋の知識人は、日本伝統のすばらしい文化に注目している。幸いに日本には吟という伝統の文化遺産がある。この伝統を維持し開発する責任は、無限のエネルギーと可能性を持つ青少年諸君にある。この意味からも、政党政派を越え、老若男女を問わず、一大ハーモニーをかなでたいものである。

（県芸振会議理事・日本詩道会長）

消息

・県教育庁に文化室発足

「芸振」事務局でもあった社会教育課は４月１日から社会教育課と文化室にわかれてたが、５月12日付で専任の文化室長に田村卓夫氏が就任、芸術文化、文化財行政にとり組むことになった。そのため事務局は文化室に置かれる。文化室の新陣容はつぎのとおり、

室長／田村卓夫、室長補佐／山村唯男、主幹／平野昭彦、庶務係長／藤原貞義、文化係長／吉良正利、文化財係長／橋本操六、なお、文化室は非常勤職員を含め12名となった。

波紋

協調なくして音楽なし

伊勢敏郎

〝音楽〟と一口に言ってもその分野は数多い。戦後二十六年。大分県も当初はその分野の数が少なかったが今ざっと数えただけでも、十五以上はあるそれぞれ日常生活のかたわら研さんを積み重ねているとはたいへん心強い限りである。そして現在、その分野を統括しているのが「県芸振会議」である。確かに横の頭はそろえられたと思うがそれぞれ縦の列を眺めたときまだまだ残されている問題が多いようである。その一つは交流の機会・場が少ないこともあるが、その前に進んで参加しよう、交わろうとする姿勢が低いことと、自己の領域内にとどまっている感が強い。年、数回の発表会形式のみで済まされてはいないか。指導者はもちろんのこと団員（会員）全体が大分県の音楽を育てるという意識をもたねばならぬと思う。それには交流が必要だろうし肩の触れあいなくして芽は育たないと思う。プロの世界でも評論家の人たちは往々にしてけむたがられる。しかし批評なくして進歩は考えられない。建設的意見はありがたいものである。が少なくともアマチュアであるわれわれにとっては参加する姿勢が欲しいと思う。参加する上での批評は納得するであろうしあすへの希望もより強く湧いてくるものである。次に参加してもらうべき音楽人口であるが大分県の場合確かに年々増加はしているようであるが、クラシックとよばれる音楽への参加の伸びが少ないようである理由はいろいろあろうが、まず興味関心をもってもらう手だてが必要ではなかろうか。現在の大分県の流れ、実体をつかむことも大切だし、一番音楽性の欲求が強い高校生の音楽教育に対する問題などいろいろあるが、要は音楽というものは本来楽しいものであるべきものが何かむつかしいもの、きびしいものという概念をうえつけがちになっていないか。出発の段階はたとえ幼稚といわれても長い目で育ててやろうという指導者こそ必要ではなかろうか底辺を広げ徐々に頂点に引き上げて行くことが大切だしその引き上げ役は県下にたくさんある。年々巣立っていく若者たちも相当数ある。それらの人たちの活躍を期待したいものである。音楽はひとりでは成り立たない。協調なくして立派な音楽はあり得ない。一グループの協調から輪をぐんぐん広げていくことこそ大分県の音楽をより発展させていくものだと言えよう。

（OBSコール指揮者）

音楽鑑賞団体

労音と民音

板倉英之

現在、大分県において音楽鑑賞団体として常時組織の拡大と音楽の鑑賞活動を行っているのは勤労者音楽協議会（略称、労音）と宗教団体を母体として組織された民主音楽協会（民音）とがあります。このほかに商店会行事として催される歌謡ショー、マスコミ主催による音楽、観劇などがあげられます。

従来、音楽会は、特定層の愛好家だけのものとしての音楽会にとどまっていましたが、11年前労音が発足し、働く人々の力による鑑賞団体として広く一般の人々の中に音楽を生活の一部として普及浸透させ、現在では県下でも中津、日田、別府と県南、県北にわたり鑑賞活動がひろげられることにより、音楽に対する一般の人々の関心と知識が深められてきたといえましょう、

しかし一方労音運動内部も今日のきびしい社会情勢を反映し多くの困難に直面しています。労音運動の基礎である職場、地域のサークル活動への圧迫、会員の減少にともなう力量の低下財政面の貧弱など、私たちが早急に克服しなければならない多くの問題をかかえ今後の労音の力量を高め、組織の拡大を一層追求してゆくことが今後の課題として残されています。

また、民音は、宗教団体をバックに市内及び別府において鑑賞活動を展開し組織を拡大していますが労音同様、いま一歩、音楽鑑賞団体としての内容の充実、一般への普及についてなお研究の余地がある様に思われます。

私たち鑑賞団体は今後、大分県下の音楽専門家、愛好家の交流の中で、大分での音楽文化の向上と普及につくすと共に、県下各音楽に関係をもたれている方々が創造のかたわら鑑賞団体にもよき理解者としてご指導、ご援助くださることを期待し、今後、県民の希望する良い音楽を安く鑑賞できる場を作るために全力をつくしたいと思います。

（県芸振会議理事・大分勤労者音楽協議会委員長）

編集後記

- 第6号の「県音楽」特集も例によって原稿が集まらず遅れたこと、集まった原稿は予定をオーバーしたため消息らんが大きく削除されたことなど残念であった。
- 第7号は「県演劇」特集、7月末発行の予定。